

帰国・渡日の

子どもたちの教育①

中国、フィリピン、ベトナムなど
 様々な国にルーツのある
 子どもたちに寄り添って



- Ⅰ 帰国・渡日の子どもたちは、なぜ日本で暮らしているのでしょうか。
- Ⅰ 子どもたちはどんなことに困り、どんな思いで学校生活を送っているのでしょうか。
- Ⅰ 日常会話ができるようになった子どもに、なぜ日本語指導が必要なのでしょうか。
- Ⅰ 帰国・渡日の子どもたちの教育で、どんなことを大切にすればよいのでしょうか？

大阪府内の多くの学校に、帰国・渡日の子どもたちは通っています

大阪府内では、ほとんどの市町村に、外国にルーツのある子どもが在籍しています。また、府内の小・中学校には、日本国籍の子どもも含め、日本語指導の必要な子どもたちが**2,091**人在籍しています（平成27年府教委調べ）。日本に来て間もない帰国・渡日の子どもたちは、日本語が話せないことに加えて、日本独特の学校文化や習慣が多く、戸惑うことも少なくありません。

大阪府には約**20**万人を超える外国籍の人々が暮らしています（平成26年末 法務省）。戦前からの歴史的な経緯により日本で暮らす韓国・朝鮮等にルーツのある人々だけでなく、**1980**年代後半から新たに帰国・渡日する人々が増え、多くの子どもたちが日本の学校に通っています。身近にいる帰国・渡日の子どもやその保護者がなぜ日本に来たのか、その背景を知ることが大切です。

外国人児童生徒の教育を受ける権利の保障

日本においては、国際人権規約等を踏まえ、義務教育就学年齢にある外国人児童生徒が公立の小・中学校への就学を希望する際には、無償で受け入れるとともに、学校において必要な支援を行うこと等により、外国人児童生徒の教育を受ける権利を保障しています。学校全体で外国人児童生徒を温かく受け入れ、その教育にあたりましょう。

1. 帰国・渡日の子どもたち

帰国・渡日の多様な背景を知りましょう

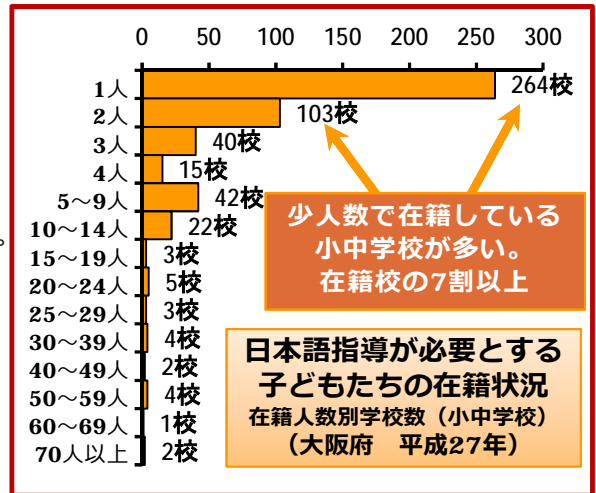
帰国・渡日に至るには、それぞれに多様な背景があります。大阪には、中国帰国者（「中国残留婦人」「中国残留孤児」）、ベトナム等の「インドシナ難民」、国際結婚による渡日、ブラジルやペルー等からの日系人等をはじめとした様々な人々が多く暮らしています。

日本に来た子どもたちの思い

生まれ育った国を離れてつらい思いを抱えていたり、急に日本で生活することになり、戸惑っていたりする子どももいます。最初の出会いの際に、丁寧に保護者や子どもの思いや願いを聞き、受容する気持ちを伝えることがとても大切です。

多くの学校に少数で在籍している子どもが増えています

近年、これまで在籍していなかった学校に直接外国から編入するが増え、少数で在籍している子どもたちも少なくありません。在籍校の約7割の学校には1～2人の少数で在籍しています。



2. 学校生活の様々な場面での子どもたちの戸惑いとその背景

◆お弁当のことで…

「お弁当ってどんなもの？ どうやって作るの？」
「おうちの人がせっかく作ってくれたけど、
日本の子どものお弁当とちがう…」

弁当の習慣がない国は世界にたくさんあり、そのような人にとって、弁当を作ることは大きな負担である。また、日本の弁当は彩りなどの見ための要素もあり、外国料理が入っている弁当を日本の友達に笑われたなどの経験があれば、自尊心は大きく傷つけられてしまうことがある。

◆「体育科」の授業で…

「水着への着替えに抵抗があるし、水が怖い…」
「運動会の練習をなぜこんなにするのか…
しんどいよ…」

水泳を授業に取り入れていない国も多く、日本のように水を潤沢に使える状況にない国や地域も多い。運動会や体育祭は有志で参加する国もあり、学年全員での集団行動やマスゲームなどの練習のような経験がなく、大きな負担を感じる子どももいる。

◆友達関係の中で…

「けんか両成敗ってどういう意味？
互いに謝るといふ解決（衝突回避）って、
あまり納得がいけないな…」

よほど「自分が悪い」と納得がいく場合しか謝らないといった文化や価値観のある国もある。

◆掃除の時間に…

「学校は勉強をするところなのに…なぜ全員
でこんな活動をしないとイケないの？」

学校の清掃は専門の業者の仕事である国も少なくない。国によっては「学校は勉強をするところ」と考えるところもあるので、日本のように教育として学校生活上の様々な活動をしている国ばかりではない。

生活言語は早期に習得できても、学習言語の習得には時間がかかります

「子どもはすぐに日本語を話せるようになる」と思われがちです。しかし実際には、自分にとっての外国語である日本語に囲まれて一日中過ごすことは、子どもに大きな負担となります。また、学校生活についてもわからないことがたくさんあります。学校体制を整え、日本語指導を行う必要があります。（「ようこそOSAKAへー帰国・渡日児童生徒受入マニュアルー」大阪府教育委員会 平成22年）

また、しばらく経つと「日本語を話せているから、もう大丈夫。」と思われがちですが、教科の学習に必要な言葉や日本語を使って考える力（学習言語）が身についているかを丁寧に確認する必要があります。日本生まれであっても保護者の母語が日本語ではない場合、学年相当の学習に参加するための日本語力が付いていない場合もあり、それぞれの子どもの状況に応じた日本語指導が引き続き必要です。

3. 外国である日本で暮らす保護者の戸惑いとその背景

日本には独特の学校文化やルールがあり、保護者も自分の経験した文化や習慣とは違うことで、戸惑いを感じる 경우가多くあります。

◆学校からの配付文書について

「学校からのプリントの内容がわからない。」
「プリントの数が多くて、自分たちにとって、どれが大事なのかわからない。」

日本の学校では、毎日多くの文書を配付しているが、翻訳やルビがなければ内容を理解できない保護者も多い。翻訳等がされていても、内容が難しく、読むのに大きな負担がかかる。また、日本の学校の経験がなく、配付数も多いので、自分たちにとってどれが重要なものであるか区別がつかない。

◆参観や懇談への参加について

「どうしてこんなに保護者が参加する行事が多いの？仕事を休めないのに…」

「よほど大きな問題がない限り保護者が学校に呼び出されることはない」「PTA活動がない」「参観や懇談の機会がほとんどない」等の国もあるため、学校教育に協力する必要性を感じにくい保護者も少なくない。また、日本で就いている仕事が不安定な雇用であることも多く、なかなか仕事を休めない事情もある。

◆学習面での家庭の協力について

「『家でも宿題を見てください。』と言われても、子どもの答えが合っているのか、わからない。母語でならわかるのに…」

日常会話ができる保護者であっても、読み書きは日本語を学習する機会がなければ難しい。保護者は協力したくてもできないことがある。

◆子どもとのコミュニケーション

「子どもが母語を忘れてしまって、日本語しか話せないので意思疎通ができない。母語でなら子どもへの思いを伝えられるのに…」

日本語を習得するにつれて、母語を使えなくなってしまう子どもたちが少なくない。一方、保護者は日本の生活が長くても、日本語を流暢に話せないことも多い。そのため、子どもと大事な話ができなくなり、子どもとの信頼関係が結べないことに悩んでいる保護者も少なくない。

◆持ち物について

「遠足の持ち物『レジャーシート』って？」

母語に翻訳されていても日本の学校経験がなければ、何のために使うのか、どんなものかがイメージできない。

このような帰国・渡日の子どもや保護者の思いを丁寧に聞き取り、その思いに寄り添いながら、日本語指導のほかにも、学校でどんな支援ができるのかを考えましょう。

4. 安心して学校で過ごすために必要なこと ～帰国・渡日の子どもへの支援～

①違う言語・文化の中で育ってきた子どもであることを尊重する

帰国・渡日の子どもの多くは、これまで暮らしてきた国や地域の文化的な習慣や価値観、母語を持っています。しかし、日本語がわからないことが壁となっていることが多く、「自分の国では自分はこんなではなかった…なんでもできたのに」と自信を失い、自分を否定してしまうことにつながる場合があります。

「日本語ができない子ども」「助けてあげなければならない子ども」という見方ではなく、教職員が、「日本とは異なるかけがえのないものを持っている子ども」であることを認識し、尊重することが大切です。

②多様な子どもたちがいることで学級の文化が豊かに

外国にルーツのある子どもを含めて、多様な子どもたちが学級にいて、自他の存在を大切に、互いに尊重し「違うことの豊かさ」をたくさん学ぶことができます。帰国・渡日の子どもに対する日本語指導などの必要な支援を行いながら、得意なことやできることに注目するなど、学級の一人一人の子どもが持っている力を生かして、互いに認め合う機会を持つことが大切です。

③アイデンティティの保持・育成（国際学級や民族クラブ等を通じた活動）

大阪府内では、日本生まれや日本と外国の両方にルーツのある子どもも増えてきました。それらの子どもたちは、自分のルーツに関わる出会いが少なく、自分の存在を肯定的に捉えにくい現状があります。

そのような子どもたちも含め、国際学級や民族クラブ等の外国にルーツのある子どもたちが校内で集まる居場所づくりが大切です。また、大阪府内には学校の枠を越えて外国にルーツのある子どもたちが集う場もあります。これらの場では、同じ立場の仲間とともに、自らのルーツにつながる言語や文化・歴史等について学び、また日頃の思いや考えを交流します。これらの活動から、自分にはどんなルーツがあり、どうしてここにいるのか、どんな可能性を持つ存在であるか等を見つめることができます。また、思いを出し合ったり、外国にルーツのある先輩等のロールモデルと出会ったりすることは、将来に目標を持てることにもつながります。そのような活動を通して、帰国・渡日の子どもたちの自尊感情を育み、アイデンティティの育成をめざすことが大切です。

「私は将来、自分のルーツを生かして外国と交流する仕事につきたい」 ～中国にルーツのあるAとの関わりから～

実践事例

6年生のAは自分が中国にルーツがあることをあまり肯定的にとらえていませんでした。Aの母親は中国人で日本語指導協力員をしています。Aは母親を尊敬しているものの、自分の気持ちをなかなか汲み取ってくれないもどかしさを持っていました。

そこで、Aが母親の生い立ちや苦労した経験を知り、自分のルーツについて考えるきっかけとして欲しいと思い、保護者の話を聞く機会をつくりました。Aの母親は、中国で必死に生きてきた話をし、Aの父親も国際結婚をした日本人の立場から、Aへの思いを伝えてくださいました。Aは、「ママが普段こうやって厳しいことを言うのは、こんな経験があったからだったんだ」と、母親の思いを改めて知ったようでした。

後日、母親のこと、そして母親につながる自分のことを、作文にまとめていきました。Aは作文に「私は将来、自分のルーツを生かして外国と交流する仕事に就きたいなと思います。外国と交流することで自分のルーツに自信を持てるようになりたいです。母のように、やりたいことをずばっとやる、考えたことを実行できる人になりたいです。」と書いていました。作文を書く過程で、Aの今までの辛い体験や、中国にルーツがあることに対する思いを知る機会にもなりました。

帰国・渡日の子どもたちの思いや保護者の願いを受け止め、学校全体で共有していくことが大切です。そして次に、学級や学年の子どもたちが気付くための取組を進めていく必要があります。

大阪府教育委員会・大阪府教育センター作成 参考資料・教材

多言語による帰国・渡日児童生徒学校生活サポートページ（大阪府教育委員会ウェブサイト）

<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/kikoku/index.html>

『ようこそOSAKAへ 帰国・渡日児童生徒の受け入れマニュアル』（大阪府教育委員会 H22）

『ようこそOSAKAへ パートⅡ 日本語支援アイデア集』（大阪府教育委員会 H23）

『ようこそOSAKAへ パートⅢ 日本語指導実践事例集』（大阪府教育委員会 H28）

『日本語指導教材 こんにちは（小学校用・中学校用）』（大阪府教育センター H26改訂）

平成28年3月
大阪府教育センター
人権教育研究室